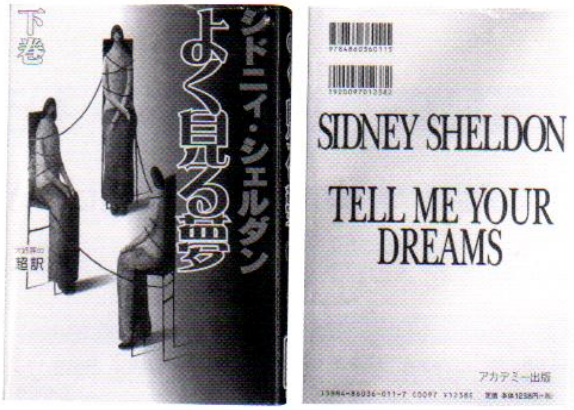
よく見る夢（原題 "TELL ME YOUR DREAMS"）

シドニィ・シェルダン著　天馬龍行訳（アカデミー出版　2003.2）

学生時代、夏休みの課題として英語の小説を1冊読んでレポートを書く、というのがあった。高校時代までは、原書を買うことはあっても、短期間のうちに1冊全部読んでしまうことはなかった。せいぜい短編を読むくらいで、小説を全部ということは経験がなかった。その時に、初めてSidney Sheldonの"IF TOMORROW COMES"（『明日があるなら』）を手にした。スリリングでテンポの良い展開に、いつの間にか引き込まれていった。以来、Sheldonの小説を読むようになった。彼の長編小説は18冊出版されているが、その中でも実際にあった医学上の症例を基として書かれたこの小説は、特に気に入っている。

主人公はアシュレー・パターソン(Ashley Patterson)、トーニ・プレスコット(Toni Prescott)、アレット・ピータース(Alette Peters)という女性である。アシュレーはバリバリのOL、トーニは陽気で乙女チックであるが情熱的、アレットは恥ずかしがり屋の芸術家。3人の女性の周辺では次々と事件が起こってゆく。恋人たちが次々と事件に巻き込まれるが、警察の捜査は疑問を抱きながらも一つの結論に達した。殺人犯としてつかまったアシュレーは、身に覚えのない事件に混乱する。そして、拘置所である事実が発覚する。この3人の女性はどんな関係があるのか、そしてアシュレーはこの後どうなるのか…。

物語は3部で構成されている。第1部では主人公を巡って様々な怪事件が起こり、第2部では弁護士のデビッド・シンガー(David Singer)が前代未聞の法廷劇を操り、第3部では医者のギルバート・



ケラー(Gilbert Keller)が事件の根底にある原因は父親のスティーブン・パターソン博士(Dr Steven Patterson)にあることを探る。登場人物の様々な心理が刻々と変化し、つい先へ先へとページが進んでいく。

Sheldonの小説は、幾つもの異なる舞台での出来事が、最後には見事なまでに一つの筋に繋がる。その展開の早さや巧妙さは、読む方も息つく暇もない程おもしろい。また、主人公は女性が多く、意外な事の展開にいつも驚かされる。Sidney Sheldonは比較的容易な英文で書かれているので、できるのなら原書でも読んでみてはどうだろうか。

（経営学部講師　浅見吏郎）

■自著紹介■

個人主義と共同体主義の両面的乗り超え：マルクス説の整序と補正の試み

元田厚生 著
梓出版社
2007.2

日本の現状は、共同体主義と個人主義の両面におよぶ乗り超えが必要である、という問題意識から本書は書かれた。

日本では個人が自立せず組織（会社）に埋没し従属している、という指摘は多い。たとえば、会社に入った人間は趣味だけでなく選挙の投票まで決められてしまう、あるいは、サラリーマンは会社第一で会社に飼われた家畜ならぬ社畜となっている、などと。しかし他方では、1980年以降の日本はそれまでの「平等神話」が崩壊し「独り勝ち社会」（「格差社会」）へ移行したことが強調され、所得格差の拡大という個人主義の弊害が強く叫ばれるようになった。

このような状況は、若干のブレはあるが近代社会の中世からの離陸時に重なる。

中世の特質は一面では個人の共同体への埋没にある。たとえば、個人が犯した違反にたいして町村などが受ける「集団罰則」や、意思決定が多数決ではなく「人の地位と機能」によって左右されることなどにそれは示される。他面で中世の特質は、共同体による生存権の保障にある。たとえば、収穫後の落ち穂は土地所有者以外の者に残されたし、荷車から落ちた麦は貧者のために拾うことを禁じたことなどにそれは示される。

近代社会の離陸とは中世的な共同体主義の両面的な否定、すなわち、一面では組織が保障する生存権の否定であり他面では組織へ個人が埋没することの否定を意味する。したがって、個人の自立を保障しながら生存権を保障することが近代社会誕生時の課題であり、日本はその課題を未だ解決していないといえる。本書はその試みの1つである。

（経済学部教授　元田厚生）